

末黒野

すぐるの

8月号 (通巻840号)



植田

小川 玉泉

(名譽主宰)

阿夫利嶺の頂映る植田かな

雲を洩る日差しを返し夏つばめ
麦笛に歩みを止めぬ川堤
老鶯のトレモ口めきて鳴き終はる
喪の家の明かりを返す柿若葉
阿夫利嶺の頂映る植田かな
洞窟の奥の涼しさ燭明かり

親戚の通夜に参じるため、車で伊勢原まで出向いた。相模川の河口の湘南大橋を過ぎ右折。晴天の夕空に大江山塊が浮かんでいた。伊勢原市街の手前に広がる水田には、早苗を植え終ったところもあった。その一枚に、阿夫利嶺の倒影が映り、懐かしい日本の原風景に浸ることが出来た。

薄
暑

灯台の螺旋階
椴青葉潮
人住まぬ島へまぶしき
卯浪かな
母の日の明るき雲を見て飽かず
旗百旒池面を均らす
若葉風

松本三千夫

虚子年尾立子愛子の墓薄暑
谷戸奥の余花の一樹や健吉忌
葉桜や芭蕉句碑より道岐れ
正面は開かずの鉄扉薔薇の苑
土牢へ磔百余段山法師
下閻の土牢寺の孔雀啼き
紫陽花や港は音のみな重き
憚りや午前三時の時鳥

夏帽子

黒滝志麻子

(副主宰)

一面の波の秀白し夏に入る
初夏の風のなかなる船溜り
薫風や動くともなき船二艘
卯波蹴る漁船や舵の重たげに
泊船に水脈引く小舟夏霞
一駅で降るるも旅愁夏帽子
島山のからりと晴るる祭かな
裏声の伸ぶる島唄夏帽子
栈橋に始まる風の卯月かな
雨雲をすべりて竹の落葉かな
広縁に暫し憩ひぬ蚊遣香
焚かぬ暖炉に栄華の跡や夏館

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

若狭塗箸

石黒興平

菜の花に囲まれ野菜直売所
春きて谷戸の桜のなほ白し
教会の尖塔一つ花の雲
橋数へ桜堤を歩きけり
控へ目に缺の音を桜守
重さうに軽さうに八重桜かな
カフエラテの泡のハートや夏近き
桜鯛湯気もろともに盛り分くる
手になじむ若狭塗箸木の芽和
腰おろす土手のぬくもり鯉幟

つばくらめ

田中臥石

晩春の横浜や友共に老い
単線の途中下車駅花の雲
潤水や林の道の花水木
落椿普羅碑へ椰の風ばかり
一瀑の視野をのみだすつばくらめ
春の星獅子座の下に地球浮く
逃水の道の湯島や聖坂
頭の上や燕巢作る駅の梁
栗国忌丁雨忌五月来たりけり
火の国の地震いつまで花は葉に



虎杖

森清堯

雨一夜夢さながらに花散りぬ
宙返る燕や雨の上がるらし
杣小屋を半ば覆ひぬ懸り藤
春ならひ沖へ沖へと水脈の伸び
丈なべて揃へて天へ松の芯
虎杖や隠沼の濃き水の鏽
公園より小綬鶏のこゑ起き抜けに
島裏よりうすき遠富士春惜しむ
池尻の堰開けられて夏来る
若楓日のちりぢりに卍池

春蘭

森清信子

花散らす亭午の雨となりにけり
故郷のつくづく遠し夕桜
春濤や風鳴りやまぬ稚児ヶ淵
せせらぎを軽く跳び越え蘆の角
山葵田や光を返す水の音
春蘭のまだ日に慣れぬ硬さかな
雨雲の沖にぬすわり春怒濤
朧夜の髪湿りきぬ浜通り
虎杖の風にもまれぬ一輛車
松の芯沖より波の尖り来る

菜の花

安齋久英

たんぽぽの絮の行方の入日かな
花三極地にまん丸の影揺らし
菜の花の黄より明るきランドセル
茅花野に白き夕風つのりけり
藤房の風に素直の峠かな
しやぼん玉あらん限りの夢のせて
月朧雲もおぼろに宿の玻璃
春愁の面持ち秘むるまなかな
神籬の水辺華やぐ藤の花
行く春の波の巻き込む藻屑かな



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



夏近し 加藤静江

湧水の輪を遠まきに葦の角
夏近し浮雲よりも白き橋
花びらと空の深さを漕送り出て残る静寂や朧月
薬や八百屋お七の小さき墓
藤まつり屋台の爺の指太き
霊水の思はぬぬくさ緑さす

蘆若葉 岡野里子

石楠花 菅野日出子

すれ違ふ海女に漂ひしやぼんの香
花明り水面明りや神田川
囀の空や鳥獣禁猟区
藤波や雨はゆかりの色となり
葉桜や川波を生むかもめどち
湿原の風の尖りぬ蘆若葉
新緑の垣にほひ立つ日の館

末黒野の秘めたる力とこしなへ
遠き地の地震を痛むや春騒雨
トンネルを出でてまばゆき山の藤
咲き満ちて風にさからふ濃山吹
土筆野や売地表示の幟立ち
石楠花の紅の繚乱岨の道
鉄線や棕欄縄ゆるぶ四つ目垣

青炎集

松本三千夫選



横浜

松浦哲夫

横浜

川村亘子

居眠りも日課の一つ葱坊主

鈍行の車窓花菜の流れゆく

象洗ふ水の輝き夏に入る

ふくよかに櫻大樹の若葉風

麦秋の遠き記憶となりにけり

老夫婦二人世帯の菖蒲の湯

横浜

上月智子

横浜

小倉純

草を這ふ山羊の顎鬚春の昼

房総の山並著き立夏かな

夕雲の鶉色淡し鯉幟

和菓子屋の間口一間武具飾り

里若葉子らの釣餌の裂きするめ

ざり蟹やバケツに映る空揺れて

夕長し止どまるごとき観覧車

囀の絶えざる今朝の目覚めかな

ウインドーにドガの踊り子街五月

堰越ゆる水のしぶきや夏立ちて

樹々深くなりたる谷戸や時鳥

白々と朝日をまとひえごの花

横浜

小倉純

珠玉めき半ば開ける花海棠

行く春や高圧線に作業員

白丁の吊す神灯夏祭

廃屋は猫の寄る場や棕櫚の花

碧落の一枝や余花の二三輪

鳥居建つ海石に寄する春の波

横浜 細島孝子

本棚のこけし飴色目借時

その昔鉄道官舎燕来る

しやぼん玉はじけ太陽濡らしけり

居眠りも元気の証し夏座敷

戦争と平和を生きて新茶汲む

矢車の音からからと朝の風

横浜 山本かつみ

風に揺れ日に崩れ行く牡丹かな

夕映に青葉の風の輝きぬ

甲斐晴れて芽吹きたしかや水芭蕉

音もなく頬撫で行きぬ若葉風

草餅の路のはみだす休み茶屋

ノルデック新緑の香に足軽く

横浜 谷貝美世

花楓仄と明るき芭蕉庵

池の黙乱す鳥声春の雲

鳥帰る浮き棧橋は雨に揺れ

藤の下人笑はせて猿の芸

春光や名立たる画家の天井画

木造の百階段を昭和の日

横浜 及川照子

微笑みは嬰の言の葉大ふぐり

ひなげしや錆びたる音の貨物船

落の原棚田の里の水のこゑ

一筋の川一面の麦の秋

麦秋や今も本読む金次郎

五月女の無農薬てふ自慢かな

横浜 橋場美篤

山門を入れるや桜の只なかに

芭蕉庵の玉解く芭蕉風さそふ

武具飾る博文邸の書院の間

新緑や鳥語溢るる雨後の森

おばしまの擬宝珠金色薄暑光

段葛まつすぐ抜くる若葉風

横浜 横路尚子

海港へ続く汽車道つつし咲く

揺れ止まる藤一斉に香り立ち

リラ冷えの街吹き抜くる風甘し

春惜しむ船出の汽笛つぎつぎと

へその緒の桐箱二つ昭和の日

柏餅先づ仏壇へ幼の手

耕 土 集

黒滝志麻子選



塩川 君子

大空や逡巡の無き鳥の恋
なまめきて菜の花明り川明り
雑踏の喧騒退きて花は葉に
たかなや足裏に野性呼び戻す
新緑や巢林一枝に身を委ね

三鷹 小林 清彦

見上げたる彦根の城や松の花
船頭の棹先止まる花筏
葉桜や一キロ歩くお濠端
恐々と渡る吊橋溪若葉
夜はさらにジャスミンの香の重くなる

大網白里 上家 正勝

長田 厚子

窓明けて読む一面や風光る
田植機や植糸欠くまに一直線
老鶯の落日背負ひ鳴き尽す
遠州のお負けするてふ新茶かな
雨上がり面撫でゆく青田風

雨の日は雨の桜を愛づるかな
海神の札を祀りぬ花見船
歓声の上がるデッキや花見船
船上の眺めさまざま花万朵
橋くぐる水上バスや花の雨

横浜 飯田久美子

佐々木永子

鳥帰る漆黒の闇恐れずに
葉桜や溶岩流れ池の底
解るまで無垢でありなむ白牡丹
新緑や名水を汲む人の列
どの家も松葉菊咲く新宅地

噂をつつみて青き大樹かな
遠山のすべて色どり山躑躅
園晴れてふつくらふはり白牡丹
下校子と言葉交はして街薄暑
竹の子の大地の力輝けり